

Episode 1

笑顔一つ見せないのは緊張もあるだろうが、私に対する贖罪の気持が強いからなのだろう。申し訳ない気持ちでいっぱいなのだ。浮かれたような顔は見せられないという風に見えた。

彼女が一礼したので私も頭を下げた。囚人服を着た夏美はどこか悲し気に見えるが、血色もよく元気そうに見えた。特にやつれているということはない。それを見て私は安心した。

彼女に囚人服は似合わない。私はそう思った。付き合っていたときは、あんなに可愛くオシャレをしていたのに、今はみんなと同じ囚人服を着て

いるなんて残念で仕方がない。でもそれも総て私のせいだ。私があんなことさえしなければ、彼女はこんな似合わない服を着ることもなかったのだ。私の方こそ彼女に罪悪感を感じた。

「綺麗になったね」

彼女は目の前のパイプ椅子に座り、第一声でそう言った。そして笑顔を見せたのだ。無理に作った笑顔のようで、私には痛々しく見えた。

「夏美は相変わらず可愛いね」

私もそう言った。正直な感想だ。彼女はそれに緩く首を横に振った。

「今は七海、ちゃんだっけ？　でも私の中では、まだ一平なんだよね」

「そうだよね」

私はちらりと後ろに立っている刑務官を見た。スラリと背が高くて、制服が良く似合っている。あの人もぼうっと立っているわけではない。何か

あったときのために監視しているのだ。そんなことを思った。

「あなたが生きててくれて本当に救われた。それを聞いたとき心底ほっとしたわ」

「ありがとう。心配かけたね。でも今は元気に働いてるから」

刺した相手にありがとうは変だと思いながら私は続けた。

「体調はどう？　ここでの生活とか、大丈夫？」

「うん。最初は戸惑ったけど、今はもう慣れた。みんなと仲良くやってるよ」

「元氣そうで安心した」

私の隣には勝俣弁護士が座っている。彼女は何も言わずに見守っていた。勝俣弁護士には私のことも総て話してあった。夏美との出会いから、私がバイク事故で性転換していることまで話してある。一応すべての状況を把

握していないと対応できないからだ。